二重目的語と格隣接効果

―新分析に向けた覚書―

田　中　秀　治

要　旨

本稿の目的は、英語の二重目的語構文（Double Object Construction：DOC）の統語構造を格隣接効果（Case Adjacency Effect）の観点から再考することである。DOC に格隣接効果があることは Stowell（1981）の研究で観察されていたが、その効果を最も原理的な形で説明した研究は Koizumi（1995）によるものである。しかし、Koizumi が提案する DOC の統語構造には経験的な問題点が存在しており、その事実は移動操作に関わる現象である凍結効果（Freezing Effect）と数量詞遊離（Quantifier Float）の観点から示すことが可能である。本稿では、そのような Koizumi の問題点を指摘することで、DOC の統語構造と格隣接効果に対して新しい分析が必要であることを明確にする。

キーワード

二重目的語構文、格隣接効果、移動、凍結効果、数量詞遊離

1．はじめに

本稿では、英語の二重目的語構文（Double Object Construction：DOC）に焦点を当てる。DOC は、（1）に示すように、*give*、*send*、*teach* などの動詞が目的語として二つの名詞を取る構文で、*the kids* のような一番目の目的語は間接目的語（Indirect Object：IO）、*a Japanese song* のような二番目の目的語は直接目的語（Direct Object：DO）と呼ばれている。

（1）Nancy quickly taught the kids a Japanese song.

このような特徴を持つ DOC は、生成文法の研究史の中で多くの注目を集めてきた。とりわけ、Larson（1988）の極めて重要な論考を含む1980年代からは、英語の DOC の統語構造や意味解釈について様々な提案が行われており、また、Marantz（1993）の通言語学的な論考が登場してからは、英語以外の言語の DOC にも適用できるような提案が行われている（e.g., Stowell 1981; Kayne 1984; Barss and Lasnik 1986; Aoun and Li 1989; Johnson 1991; Bowers 1993; Marantz 1993; Koizumi 1995; Pesetsky 1995; Baker 1997; Runner 1998; Bruening 2001; McGinnis 2001; Harely 2002; Pylkkänen 2002; Beck and Johnson 2004; Basilico 2008; Bruening 2010; Larson 2010; Georgala 2012; Janke and Neeleman 2012; Larson 2014; Legate 2014; Bruening 2015; Hallman 2015; Harley and Jung 2015; Jerro 2016; Bruening 2018; Holmberg, Sheehan, and Wal 2019; Larson, Antonyuk, and Liu 2019; Beavers and Koontz-Garboden 2020; Bruening 2021; Nie 2023）。

しかし、先行研究の提案にはそれぞれの利点があるものの、それらが英語の DOC に関する事実を全て説明できるというわけではない。そのような事実のうち本稿が着目したいのは、格隣接効果（Case Adjacency Effect）というものである。格隣接効果は、元々 Stowell（1981）が確立した一般化の一つで、端的に言うと「いかなる副詞も動詞とその目的語の間には現れることができない」という事実を指す。ここで強調すべきは、Stowell が観察したように、この効果が目的語を一つしか持たない他動詞構文だけではなく DOC にも適用されるという点である。例えば（２）は、様態副詞の *quickly* が動詞の *taught* とその二つの目的語の間に生じることができないことを示している。[注1]

（２）様態副詞

a.　Nancy *quickly* taught the kids a Japanese song.

b. ?* Nancy taught *quickly* the kids a Japanese song.

c. ?* Nancy taught the kids *quickly* a Japanese song.

d.　Nancy taught the kids a Japanese song *quickly*.

他の種類の副詞に関しては、その種類に応じて追加で出て来られない位置を持つこともあるが、以下に示すように、どの種類の副詞も一貫して「動詞と IO と DO の間」には現れることができない。

（3）程度副詞

a. ?* Nancy *well* taught the kids a Japanese song.

b. * Nancy taught *well* the kids a Japanese song.

c. ?* Nancy taught the kids *well* a Japanese song.

d. Nancy taught the kids a Japanese song *well*.

（4）主語副詞

a. Nancy *happily* taught the kids a Japanese song.

b. ?* Nancy taught *happily* the kids a Japanese song.

c. ?* Nancy taught the kids *happily* a Japanese song.

d. Nancy taught the kids a Japanese song *happily*.

（5）推量副詞

a. Nancy *probably* taught the kids a Japanese song.

b. * Nancy taught *probably* the kids a Japanese song.

c. ?* Nancy taught the kids *probably* a Japanese song.

d. Nancy taught the kids a Japanese song, *probably*.

よって、DOC の構造分析がより妥当なものであるためには「動詞と IO と DO の間に副詞が入ることができないのはなぜか」という問いに答える必要があるが、その説明に取り組んだ先行研究は少ない。実際、上記の中から取り上げると、Stowell（1981）、Johnson（1991）、Koizumi（1995）、Runner（1998）、Janke and Neeleman（2012）に限られる。

さらに、これら五つの研究によって提案された DOC の構造分析が全て妥当というわけでもない。筆者が判断する限り、DOC の格隣接効果を最も原理的に説明できているのは Koizumi（1995）と Runner（1998）で、実はこの二つは独立した研究でありながら実質的に同じ説明方法を提案

している。ここでは、より早期の研究であるKoizumiだけに焦点を当ててみよう。簡潔に言うと、Koizumiは、Chomsky（1993）の一致格理論（Agreement-based Case Theory）のみを使って、DOCだけではなく様々な構文の格隣接効果を説明することに成功している。つまり、Koizumiの試みは還元主義的で、動機付けのない補助仮説などは一切導入せずに、独立に提案された一般原理から格隣接効果を導出しようとしたのである。一方、Stowell（1981）、Johnson（1991）、Janke and Neeleman（2012）の説明は、一般原理ではなく補助仮説に基づいたものであると判断できるため、その補助仮説をどう原理的に導出するかという課題が残されている。このように、KoizumiによるDOCの構造分析は、格隣接効果も説明できるという点で上記の先行研究よりも優れているため、経験的な問題点が示されない限りは、今後の研究から常に有力な代替案として認識される必要がある。

以上の背景を踏まえ、本稿ではKoizumi（1995）によるDOCの構造分析を取り上げ、その経験的妥当性を検証する。本稿の立場としては、Koizumiが提案する統語構造はDOCの格隣接効果の導出以外にも経験的なメリットがあることを示しつつも、最終的にはそれに反論していくことになる。というのも、そのKoizumiの提案は同時に経験的に誤った予測も生み出してしまうからである。なお、本稿では、その問題点を克服するようなDOCの構造分析を提示するということまではしない。つまり、Koizumiの重要な成果を強調しながらその問題点を明確にすることで、今後の研究に対して「DOCの統語構造と格隣接効果に対する新しい分析の必要性」を示すことが本稿の最大の目的となる。

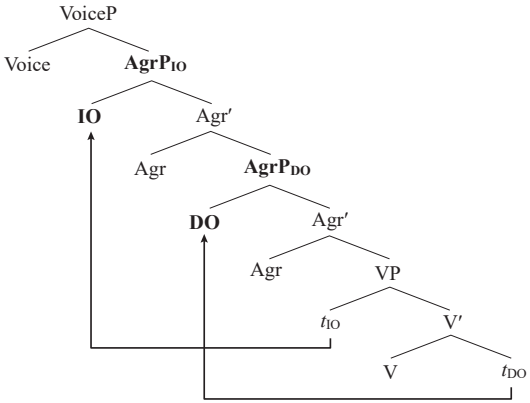
このような主旨に沿って、本稿は次のように構成される。2節では、まずKoizumi（1995）が提案するDOCの統語構造がどのように格隣接効果を導出するかを解説した後に、その構造には他にも独立した経験的なサポートがあることを示す。一方、3節では、そのようなKoizumiの提案を批判的に見直す。特に、その統語構造自体に経験的な問題点があることを、移動操作に関わる現象である凍結効果（Freezing Effect）と数量詞遊離（Quantifier Float）の観点から明示する。4節では、本稿の結論を述べ

た後に今後の調査課題を簡潔にまとめる。

2．Koizumi（1995）の提案内容

本節では、最初にKoizumi（1995）によるDOCの構造分析を確認する。まず、Koizumiの提案土台にはChomsky（1993）の一致格理論がある。この理論は、DPへの格付与を行う機能範疇として一致句（Agreement Phrase：AgrP）というものを導入して、その主要部Agrの指定部に移動してきたDPに対してのみ格付与が行われると仮定している。このような一致格理論を前提にして、Koizumiは「AgrP指定部へのDP移動が英語では顕在的に行われる」と提案し、さらに「DOCの統語構造は二つのAgrPを持つ」と仮定している。一つ目のAgrPは、VPを補部に取ってその中のDOを指定部に移動させるもので、便宜的に$AgrP_{DO}$と表記される。二つ目のAgrPは、その$AgrP_{DO}$を補部に取ってVP内のIOを指定部に移動させるもので、これは$AgrP_{IO}$と表記される。つまり、Koizumiが提案するDOCの統語構造は（6）に示す通りで、VP内に基底生成されたDOとIOがそれぞれ$AgrP_{DO}$と$AgrP_{IO}$の指定部に顕在的な移動を行うような構造になっている。

（6）Koizumi（1995）のDOC構造



なお、この構造の一番上にある Voice とは Kratzer（1996）が提案した機能範疇で、能動・受動など「態の区別」を行い、能動態の素性を持つ場合は指定部に外項 DP を導入する働きを持つ。Koizumi（1995）では、この働きを持つ主要部に別の名称を与えているが、名称の違いは本稿の議論に影響しない。ここで重要なのは、Voice 主要部まで V 主要部が顕在的に移動すると仮定されている点である。この主要部移動は Koizumi 以外でも広く受け入れられているものであり、実際（７）に示すように、V が二つの Agr 主要部を引き連れて Voice まで移動することにより、DOC の実際の語順（i.e., V － IO － DO）を生み出すことができる。

（７）$[_{\text{VoiceP}}$ **V**-Agr-Agr-Voice $[_{\text{AgrPIO}}$ **IO** t_{Agr} $[_{\text{AgrPDO}}$ **DO** t_{Agr} $[_{\text{VP}}$ … t_{V} …]]]]

以上のように、Koizumi（1995）は、IO と DO が最終的に Agr という機能範疇の指定部に現れると提案しているが、その Agr の導入こそが DOC の格隣接効果を導出することにつながる。まず、最も重要なのは「Agr は純然たる機能範疇」という Koizumi（1995: 28, ft.12）の仮定である。これはつまり、Agr が「語彙的意味を一切持たない解釈不可能な要素」で、それゆえに副詞句（Adverb Phrase：AdvP）が修飾語として AgrP 内に出てきてもその修飾解釈を認可できないという意味である。なお、このような Agr の捉え方自体は概念的に十分に動機付けできる。というのも、元々 Agr は Chomsky（1993）などで「動詞が主語や目的語と人称・数・性で一致した時に付加される屈折形態素」を指す範疇として導入されているが、その屈折形態素が動詞の意味解釈に全く影響しないのは明らかである。よって、Agr が「意味解釈に全く貢献できない屈折形態素」とされる以上は、その Agr の投射である AgrP が AdvP と修飾関係を持てないと仮定するのは自然である。

このような仮定に基づくと、DOC の格隣接効果は Koizumi（1995）の DOC 構造から容易に導出可能である。まず、DOC で AdvP が生起できな

い位置は全て AgrP の領域内にあると分析できることに注意されたい。例えば、（2）で示した *quickly* の分布をもう一度見てみると、（8）に示すように「IO と DO のすぐ前には出て来られない」というものになる。

（8）Nancy (*quickly*) taught (?**quickly*) the kids (?**quickly*) a Japanese song (*quickly*).

ここで、これら AdvP が生起不可能な位置を構造化すると、（9）のように表示可能である。

（9）a. [$_{\text{VoiceP}}$ Voice [$_{\textbf{AgrPIO}}$?**quickly* [$_{\text{Agr''}}$ **IO** [$_{\text{Agr'}}$ Agr [$_{\text{AgrPDO}}$ …]]]]]
　　b. [$_{\text{AgrPIO}}$ **IO** [$_{\text{Agr'}}$ Agr [$_{\textbf{AgrPDO}}$?**quickly* [$_{\text{Agr''}}$ **DO** [$_{\text{Agr'}}$ Agr]]]]]

つまり、Koizumi の DOC 構造を前提にした場合、（8）で AdvP が生起できない位置は語順的に Agr の投射内にあると見なす必要があるため、AdvP は Agr の投射内に付加することはできないという一般化が得られる。そして、なぜそれが不可能なのかは上で述べた通りで、解釈不可能な要素である Agr の投射内ではいかなる AdvP の修飾関係も認可できないという説明が与えられる。このように、Koizumi は、Chomsky（1993）の一致格理論という独立に提案された原理体系だけを使って格隣接効果を導出しているという点で、その説明は原理的なものだと評価することができる。

重要なことに、Koizumi（1995）の DOC 構造は他にも様々な点で経験的なメリットに溢れている。最も決定的なのは、Koizumi が「IO だけではなく DO も VP 外に移動する」と提案している点で、Runner（1998）が指摘するように、この提案は経験的に十分に動機付けされる。というのも、その提案は「DO は VP 内に生起するものを C 統御する」という帰結をもたらすが、その帰結は実際に正しいからである。この点を示すために、DOC における等位接続のパターンとその中での修飾語（Modifier：MO）の分布を確認してみよう。まず、Runner によると、（10）のように DO と MO で等位項を形成でき、かつ、MO だけでも等位項を形成することができる。

（10）a. I gave John [*the book* in the morning] and [*the magazine* in the evening].
b. I gave Greg *a gift* [on purpose last Christmas] but [only reluctantly this year].　（Runner 1998: 132–133）

これらの事実は、Koizumi の DOC 構造で容易に捉えられる。つまり、（10a）では $AgrP_{DO}$ のレベルで等位接続が起こっており、一方（10b）では VP のレベルで等位接続が起こっていると見なすことができる。単純化してしまうと、（10a, b）の等位接続構造はそれぞれ（11a, b）のように表示可能である。

（11）a. **[**[$_{AgrP}$ DO [$_{VP}$ MO]] *and* [$_{AgrP}$ DO [$_{VP}$ MO]]**]**
b. [$_{AgrP}$ DO **[**[$_{VP}$ MO MO] *but* [$_{VP}$ MO MO]**]**]

重要なことに、これらの構造分析が正しいとすると、「DO はその右側にくる MO を C 統御できる」ということになる。よって、例えば、*any* のような否定極性項目（Negative Polarity Item：NPI）は否定要素に C 統御されなければならないということを前提にすると、DO が *none* などの否定要素である場合、その右側にくる MO 内の NPI を認可できると予測されるが、この予測は（12）に示す通り事実に合っている。

（12）a. Richie showed Fonzie [*none* of the pictures] during [*any* of the exhibitions].
b. ＊Richie showed Fonzie [*any* of the pictures] during [*none* of the exhibitions].
（Runner 1998: 130）

このように、Koizumi の「IO だけではなく DO も VP 外に移動する」という提案は、Runner が観察した等位接続と NPI に関する事実を上手く捉えられる。[注2] よって、Koizumi の DOC 構造は、格隣接効果を説明できるという点も含めて様々な観点から経験的に支持することができる。

3．Koizumi（1995）の問題点

しかし、Koizumi（1995）の DOC 構造が完璧かというと決してそうではなく、経験的な問題点も確実に存在している。この問題点は、実はすぐ上で議論した「IO だけではなく DO も VP 外に移動する」という提案に直結している。確かに、DO の移動は等位接続と NPI に関する事実を上手く捉えることができるが、それは同時に「DO が移動要素に典型的な特徴を示すはず」という予測を生み出す。以下では、その予測が誤っていることを二つの観点から明らかにする。具体的には、DOC における凍結効果（Freezing Effect）と数量詞遊離（Quantifier Float）のパターンを提示し、それらのパターンが Koizumi の DOC 構造では上手く捉えられないことを示していく。

まず、凍結効果とは何かという点から確認していこう。これは、Wexler and Culicover（1980）が提言した一般化で、「移動した要素の中からは何も移動できない」という事実を指しており、Corver（2017）が概説するように、その妥当性は多くのデータから支持される。例えば、この効果を最も単純に示せる例の一つは、「主語位置への移動」を含む「受動態構文」である。（13a）のように、能動文の目的語からは *wh* 要素の移動が可能であるが、（13b）のように、受動文で主語位置へ移動した目的語からはその抜き出しが困難になる。

（13）a.　*Who*$_i$ did John select [a picture of t_i]?

　　b. *? *Who*$_i$ was [a picture of t_i] selected?

他にも「主語位置への移動」が関わる例としては、Merchant（1999）が観察した「存在構文」の例がある。（14a）のように、虚辞の *there* が主語位置を占めている場合、いわゆる意味的主語からの抜き出しは可能であるが、（14b）のように、*there* がなく意味的主語が主語位置に移動した場合は、その意味的主語からの抜き出しはできなくなってしまう。

（14）a.　*Which candidate*$_i$ were there [posters of t_i] all over town?

b. ＊*Which candidate*$_i$ were [posters of t_i] all over town?

（Merchant 1999: 254）

もちろん、(13)と(14)の事実は、移動要素からの抜き出しというよりも、単に「主語位置からの抜き出しが不可能」ということを示しているだけの可能性もある。しかし、Narita（2014）が指摘するように、(14）と同じ対比は例外的格付与（Exceptional Case-Marking：ECM）構文でも観察される。例えば、以下の（15）は、(14）の文を ECM 構文に埋め込んだ例である。

（15）a.　*Which candidate*$_i$ did you believe there to be [posters of t_i] all over the town?

b. ＊*Which candidate*$_i$ did you believe [posters of t_i] to be all over the town?

（Narita 2014: 108）

つまり、(15b）では、従属節の意味的主語が（15a）の *there* がある位置に移動しているが、この移動は「主節の目的語位置への移動」であることが様々な観点から示されている（e.g., Postal 1974; Lasnik and Saito 1991; Johnson 1991; Bowers 1993; Koizumi 1995; Richards 1997; Runner 1998; cf. Lasnik 1999)。[注3] よって、(15）の事実は「主語位置だけではなく目的語位置へ移動した要素からも抜き出しが不可能」ということを示すため、「移動した要素の内部からは何も移動できない」という一般化は妥当であると考えられる。もちろん、このような凍結効果を原理的にどうやって導出するかは重要な論点であるが（e.g., Bošković 2018)、少なくともその効果を「ある要素が移動しているかどうかを確認するための判断テスト」として利用することに問題はないだろう。

それでは、ここで Koizumi（1995）の DOC 構造に立ち返り、凍結効果の観点から「DO が VP 外に移動する」という提案の妥当性を検証してみよう。Koizumi が主張するように、もし DO が移動するなら、凍結効果に

よって DO からの抜き出しは不可能であると予測される。しかし、(16) に示すように、DO からの抜き出しは、受動文で移動した目的語の場合とは異なり完全に可能である。

(16) a. *? *Who*$_i$ was [a picture of t_i] selected?
b. *Who*$_i$ did you give him [a picture of t_i]?

なお、Koizumi によると、主語位置への移動も「DP が格を得るために行う AgrP への移動」の一種である。よって、DO が AgrP に移動すると考える以上は、(16a, b) の間に許容可能性の差はないはずだが、その差は確実にある。つまり、凍結効果の観点に基づくと、DO の移動を仮定することは妥当ではないと結論付けられる。

重要なことに、この結論の妥当性をさらに補強する事実として、数量詞遊離に関するものがある。数量詞遊離とは、*all*、*both*、*each* などの数量詞がその量化の対象となる DP とは離れた位置に現れるという現象で、そういった数量詞のことを遊離数量詞 (Floating Quantifier：FQ) と呼ぶ。例えば、(17a) の *all* が FQ の例で、この *all* は主語の *the boys* に直接付加していないが、意味的には関連付けられており、*all* が主語に直接付加している (17b) と同じような意味解釈をもたらすことができる。

(17) a. The boys may *all* like Mary.
b. *All* the boys may like Mary.

このような FQ をどうやって統語的に派生するかという問題は、生成文法では重要な論点の一つとなっている。代表的なアプローチとしては二つあって、残留分析 (e.g., Sportiche 1988; Bošković 2004) と副詞分析 (e.g., Bobaljik 1995, Brisson 1998) が有名である。ただし、これらの分析には経験的な問題があることが Tanaka (in press) で指摘されている。例えば、本稿に関わることで言うと、FQ を一種の AdvP と見なす副詞分析は、FQ

の分布も DOC の格隣接効果に従うと予測するが、この予測は（18）に示すように誤りである。

（18）a.　Nancy taught the kids *all* a Japanese song.　（FQ）
　　b. ?*Nancy taught the kids *well* a Japanese song.　（程度副詞）
　　c. ?*Nancy taught the kids *quickly* a Japanese song.　（様態副詞）
　　d. ?*Nancy taught the kids *happily* a Japanese song.　（主語副詞）
　　e. ?*Nancy taught the kids *probably* a Japanese song.　（推量副詞）

よって、本稿では Tanaka が Fitzpatrick（2006）の提案に基づいて辿り着いた「FQ が認可される場合の一般化」を参考にしていく。その一般化とは、（19）に示すように「FQ が認可されるためには、意味的に関連付けられる DP（つまり、量化対象となる DP）がその FQ の位置を移動によって越えなければならない」というものである。

（19）… DP_i … FQ … t_i …

要するに、（19）は「FQ は量化対象となる DP の移動経路に現れなければならない」ということを意味する。この一般化の妥当性は、例えば、主語 DP が認可する FQ の分布から示すことができる。まず、Krazter（1996）も含め多くの研究で採用されている「述部内主語仮説」では、他動詞の主語 DP が最初から主語位置（e.g., TP の指定部）に生じるわけではなく、まずは述部領域（e.g., VoiceP の指定部）に基底生成されて、そこから主語位置に移動すると仮定されている。つまり、一つの例として *the boys may like Mary* という文構造を考えてみると、（20）のように *the boys* が VoiceP から TP に移動すると分析するのである。

（20）$[_{TP}$ *the boys*$_i$ $[_{T'}$ may $[_{VoiceP}$ t_i $[_{Voice'}$ Voice $[_{VP}$ like Mary $]]]]]$

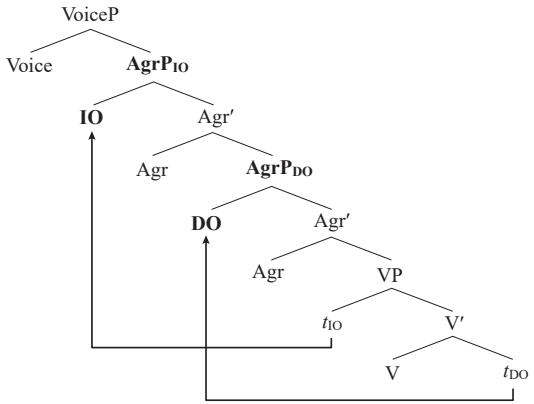
よって、FQ 認可の一般化に基づくと、主語 DP と関連付けられる FQ は「動詞や目的語の後ろには生起できない」と予測されるが、（21）に示す通り、その予測は正しい。

（21）a.　The boys *all* may like Mary.
　　b.　The boys may *all* like Mary.
　　c. ?* The boys may like *all* Mary.
　　d. ?* The boys may like Mary *all*.

このような FQ 認可の一般化が正しいとすると、二つの帰結が生まれる。一つは「FQ を認可する DP は移動している」という帰結で、もう一つは「FQ は少なくとも関連付けられる DP の基底位置の上には生起できる」という帰結になる。

ここで、Koizumi（1995）の提案に立ち返り、その妥当性を数量詞遊離の観点から検証する。まず、Koizumi の DOC 構造を（22）でもう一度確認してみよう。

（22）Koizumi（1995）の DOC 構造



最初に「IO が VP 外に移動する」という提案を取り上げると、この点は Koizumi が正しいと言える。というのも、上の（18）で確認したように、IO は FQ を認可できるからである。つまり、先ほどの「FQ は量化対象となる DP の移動経路に現れなければならない」という一般化と、その帰結である「FQ を認可する DP は移動している」という点に基づくと、Koizumi の DOC 構造は、（23）の FQ の分布を上手く捉えることができる。

（23）a.　Nancy taught *all* the kids a Japanese song.　（IO に直接付加）
　　b.　Nancy taught the kids *all* a Japanese song.　（FQ として OK）
　　c. ＊Nancy *all* taught the kids a Japanese song.　（不可能な FQ）

ただし、このように IO が FQ を認可するという事実は、同時に Koizumi の「DO が VP 外に移動する」という提案を否定することにもつながる。まず、FQ 認可の一般化の二つ目の帰結によると、「FQ は少なくとも関連付けられる DP の基底位置の上には現れる」ということになる。これが正しいとすると、Koizumi の DOC 構造は「IO が認可する FQ は DO の後ろにも表れることができる」と予測する。というのも、（22）の構造では、DO が IO の基底位置を飛び越えて $AgrP_{DO}$ に移動しているからである。しかし、（24）に示すように、その予測は誤っており、DO の後ろに IO と関連付けられる FQ は生じることはできない。

（24）＊Nancy taught the kids a Japanese song *all*.

よって、Koizumi の「DO が VP 外に移動する」という提案は、凍結効果だけではなく、数量詞遊離の観点からも支持されないと結論付けられる。

4．おわりに

本稿では、英語の DOC の統語構造を再考する一環として、Koizumi（1995）の提案を取り上げ、その経験的妥当性を検証してきた。まず、

Koizumi の DOC 構造は、Stowell（1981）の「格隣接効果」を原理的に説明できるという点では間違いなく他の研究よりも優れており、またそれ以外にも Runner（1998）が観察した「等位接続と NPI」に関する事実も上手く捉えられるという点で、今後の研究にとって参考にすべき提案だと考えられる。その一方で、Koizumi の DOC 構造には経験的な問題点もあり、本稿ではその事実を移動操作に関わる「凍結効果」と「数量詞遊離」の観点から示した。特に、その二つの現象は「DO が VP 外に移動する」という仮定に反するような性質を示すため、本稿ではその仮定をそのまま受け入れるわけにはいかないと結論付けている。重要なことに、その「DO が VP 外に移動する」という仮定は、Koizumi が「格隣接効果」を説明する上で不可欠なものであるため、その仮定を棄却するということは、その説明も見直さなければならないことを示唆している。よって、本稿では、その結論として、DOC の統語構造と格隣接効果に対しては今後も新しい分析を考案する必要があることを主張する。

最後に、DOC に関して今後行うべき調査の一つとして、IO の統語的性質を調べる必要性があることを述べる。本稿では、「IO が移動している」ということを数量詞遊離の観点から支持しており、この点では Koizumi（1995）の提案に賛同している。しかし、IO が移動しているのであれば、予測としては「IO は DO と違って凍結効果を示し、IO からの抜き出しは不可能なはず」ということになるが、実際はどうなのだろうか？

この点については、Bruening（2018: 553ff.）が指摘するように、先行研究の間で判断が異なるようである。ただし、少なくとも Runner（1998）、Beck and Johnson（2004）、Harley and Jung（2015）は、IO からの抜き出しを不可能と判断している。例えば、Runner は（25）のように「DO と IO からの抜き出し」を比べて後者は許容できないとしている。

（25）a.　*Who*$_i$ did you say Cindy sent Bobby [a picture of t_i]?

　　b. ＊*Who*$_i$ did you say Cindy sent [a friend of t_i] a picture?

（Runner 1998: 161）

次に、Beck and Johnson は（26）のように「他動詞構文の目的語と IO からの抜き出し」を比べて後者は許容できないとしている。

（26）a.　*Who*$_i$ did you visit [a friend of t_i] yesterday?
　　b. ＊*Who*$_i$ did you send [a friend of t_i] a book?
（Beck and Johnson 2004: 102）

また、Harley and Jung は（27）のように「*to* 与格構文の目的語と IO からの抜き出し」を比べて後者は許容できないとしている。

（27）a.　*Who*$_i$ did you send [pictures of t_i] to all the season ticket holders?
　　b. ＊*Who*$_i$ did you send [relatives of t_i] invitations to the wedding?
（Harley and Jung 2015: 717）

一方、本稿でも IO からの抜き出し可能性について調査してみたが、明確な結論は得らなかった。まず、本稿の調査でも（28）のような違いが確認でき、これだけ見れば、DO からの抜き出しは可能だが、IO からの抜き出しは困難であると一見言えそうである。

（28）a.　*Who*$_i$ did you give him [a picture of t_i]?
　　b. ＊*Who*$_i$ did you give [a friend of t_i] your car?

しかし、実は（29）のような違いも存在しており、他動詞構文の目的語からの抜き出しであっても、その名詞主要部が *picture* ではなく *friend* だと抜き出しが困難になってしまう。

（29）a.　*Who*$_i$ did John select [a picture of t_i]?
　　b. ?＊*Who*$_i$ did you meet [a friend of t_i]?

この *picture* と *friend* に対比があるという傾向はかなり強く、その二つを前置詞目的語として使用しても、(30) に示すようにその対比は依然として残る。

(30) a.　*Who*$_i$ are you looking [for [a picture of t_i]]?
　　b. ?* *Who*$_i$ did you give your car [to [a friend of t_i]]?

これらの事実、特に (29b) は、Beck and Johnson (2004) が観察した (26a) の事実とは食い違っており、そもそも *friend* からの抜き出しには判断の多様性があるように思われる。その理由は現時点では不明だが、あくまで推測で言うと、*friend* も含め、*sister*、*relative*、*neighbor* などの名詞に *of* を付けてその補部に代名詞を置く場合は、*a friend of mine* のように、対格代名詞の *me* ではなく所有代名詞 *mine* を使うことと関係している可能性がある。つまり、*a picture of* ~ は「～を写している写真」という意味で使えるため、*of* の補部 DP をいわば目的語のように扱っているが、*a friend of mine* は「私の友達の一人」という意味で、その *of* は「部分全体の関係」を表しているため、そのような *of* の意味の違いが *friend* からの抜き出しを難しくしているのかもしれない。よって、少なくとも IO から抜き出しが可能かどうかを確認する上では、IO の名詞主要部として *friend* などを使用せずに確認する方が良いだろう。この主旨に沿って IO からの抜き出し可能性について調査することは、今後の課題の一つとしたい。

謝辞

本稿を執筆するにあたって、様々な研究者や査読者の方からその内容や構成について有益なコメントをいただいた。本稿の中にある不備は全て筆者の責任に帰されることは言うまでもないが、お世話になった方々に対して改めて感謝の意を記したい。なお、本研究は JSPS 科研費若手研究種目 21K13024の助成を受けたものである。

注

1．本稿で引用情報がない例文データは、全て筆者が2022年３月～９月に三重大学で行った四回の調査から得られたものである。各調査では、異なる20名のアメリカ英語母語話者を Amazon Mechanical Turk 上で募り、各参加者にはオンライン上で調査毎に異なる例文群に対して許容性判断タスクを行ってもらった。そのタスクは、例文の許容性を六段階のスケールで評価してもらうもので、そのスケールは、１ (Unacceptable)、２ (Very degraded, and close to unacceptable)、３ (Degraded, and the status is unclear)、４ (Somewhat degraded, but acceptable)、５ (Slightly degraded, but acceptable)、６ (Acceptable) という値から構成されている。本稿では、その評価の平均値が「１点から２点台以下」だった例文には「*」を、「３点台」だった例文には「?*」を付けており、「４点台以上から６点」だった例文には何も付けていない。なお、今回はこれ以上のデータ分析は行っておらず、単純に「平均値が３点台以下の例文は許容困難」と見なすなど、データ分析という点ではインフォーマルな議論を行っていることに注意されたい。

2．Runner（1998）の観察が非常に重要であることは特筆に値する。というのも、その観察は、英語の DOC 構造に関して提案されてきた他の分析を反証するために使えるからである。例えば、現在も影響力のある Harley（2002）や Pylkkänen（2002）の分析では、IO と DO が VP の補部領域に完全に埋め込まれており、DO が VP レベルの修飾語を C 統御することは不可能である。よって、これらの分析は（10）の等位接続と（12）の NPI に関する事実を捉えられない。なお、DOC の格隣接効果をどのように導出するかについても、Harley や Pylkkänen では議論されていない。

3．Lasnik（1999）は、ECM 構文における「否定の作用域解釈」や不変化詞を含む「群動詞 *make out*」が作り出す ECM 構文の観察に基づいて「主節の目的語位置への移動は随意的である」と主張している。しかし、Lasnik 自身も随所で認めている通り、その主張の根拠となる許容性判断には微妙なものが含まれている。実際、Richards（1997: 146ff.）では、Lasnik が主張の根拠として使用している *make out DP to V* というパターンを許容不可能だと判断している。この判断が正しければ、Lasnik の「主節の目的語位置への移動は随意的である」という主張は誤っており、その移動は義務的であると考える必要がある。

参考文献

Aoun, Joseph and Yen-hui Audrey Li. (1989) Scope and constituency. *Linguistic Inquiry* 20: 141–172.

Baker, Mark. (1997) Thematic roles and syntactic structure. In *Elements of grammar: Handbook in generative syntax*, ed. Liliane Haegeman, 281–337. Dordrecht: Kluwer.

Barss, Andrew, and Howard Lasnik. (1986) A note on anaphora and double objects. *Linguistic Inquiry* 17: 347–354.

Basilico, David. (2008) Particle verbs and benefactive double objects in English: High and low attachments. *Natural Language and Linguistic Theory* 26: 731–773.

Beavers, John and Andrew Koontz-Garboden. (2020) *The roots of verbal meaning*. Oxford: Oxford University Press.

Bobaljik, Jonathan. (1995) Morphosyntax: The syntax of verbal inflection. Unpublished doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.

Bošković, Željko. (2004) Be careful where you float your quantifiers. *Natural Language and Linguistic Theory* 22: 681–742.

Bošković, Željko. (2018) On movement out of moved elements, labels, and phases. *Linguistic Inquiry* 49: 247–282.

Brisson, Christine. (1998) Distributivity, maximality, and floating quantifiers. Unpublished doctoral dissertation, Rutgers University.

Bowers, John. (1993) The syntax of predication. *Linguistic Inquiry* 24: 591–656.

Bruening, Benjamin. (2001) QR obeys superiority: Frozen scope and ACD. *Linguistic Inquiry* 32: 233–273.

Bruening, Benjamin. (2010) Ditransitive asymmetries and a theory of idiom formation. *Linguistic Inquiry* 41: 519–562.

Bruening, Benjamin. (2015) Depictive secondary predicates, light verb *give*, and theories of double object constructions. Unpublished manuscript, University of Delaware.

Bruening, Benjamin. (2018) Depictive secondary predicates and small clause approaches to argument structure. *Linguistic Inquiry* 49: 537–559.

Bruening, Benjamin. (2021) Implicit arguments in English double object constructions. *Natural Language and Linguistic Theory* 39: 1023–1085.

Chomsky, Noam. (1993) A minimalist program for linguistic theory. In *The view from Building 20*, eds. Kenneth Hale and Samuel Keyser, 1–52. Cambridge, MA: MIT Press.

Corver, Norbert. (2017) Freezing effects. In *The Wiley Blackwell companion to syntax, second edition*, eds. Martin Everaert and Henk van Riemsdijk. https://doi.org/10.1002/9781118358733.wbsyncom055

Fitzpatrick, Justine. (2006) The syntactic and semantic roots of floating quantification. Unpublished doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.

Georgala, Efthymia. (2012) Applicatives in their structural and thematic function: A minimalist account of multitransitivity. Unpublished doctoral dissertation, Cornell University.

Hallman, Peter. (2015) Syntactic neutralization in double object constructions. *Linguistic Inquiry* 46: 389–424.

Harley, Heidi. (2002) Possession and the double object construction. *Yearbook of Linguistic Variation* 2: 29–68.

Harley, Heidi, and Hyun Kyoung Jung. (2015) In support of the P_{HAVE} analysis of the double object construction. *Linguistic Inquiry* 46: 703–730.

Holmberg, Anders, Michelle Sheehan, and Jenneke van der Wal. (2019) Movement from the double object construction is not fully symmetrical. *Linguistic Inquiry* 50: 677–722.

Janke, Victoria, and Ad Neeleman. (2012) Ascending and descending VPs in English. *Linguistic Inquiry* 43: 151–190.

Jerro, Kyle. (2016) The syntax and semantics of applicative morphology in Bantu. Unpublished doctoral dissertation, University of Texas at Austin.

Johnson, Kyle. (1991) Object positions. *Natural Language and Linguistic Theory* 9: 577–636.

Kayne, Richard. (1984) *Connectedness and binary branching*. Dordrecht: Foris.

Koizumi, Masatoshi. (1995) Phrase structure in minimalist syntax. Unpublished doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.

Kratzer, Angelika. (1996) Severing the external argument from its verb. In *Phrase structure and the lexicon*, eds. Johan Rooryck and Laurie Zaring, 109–137. Dordrecht: Kluwer.

Larson, Richard. (1988) On the double object construction. *Linguistic Inquiry* 19: 335–391.

Larson, Richard. (2010) On Pylkkänen's semantics for low applicatives. *Linguistic Inquiry* 41: 701–704.

Larson, Richard. (2014) *On shell structure*. London: Routledge.

Larson, Richard, Svitlana Antonyuk, and Lei Liu. (2019) Superiority and scope freezing. *Linguistic Inquiry* 50: 233–252.

Lasnik, Howard. (1999) Chains of arguments. In *Working minimalism*, ed. David Samuel Epstein and Norbert Hornstein, 189–215. Cambridge, MA: MIT Press.

Lasnik, Howard, and Mamoru Saito. (1991) On the subject of infinitives. *Papers from the 27th Regional Meeting of the Chicago Linguistic Society*, *CLS* 27(1): 324–343.

Legate, Julie. (2014) *Voice and v: Lessons from Acehnese*. Cambridge, MA: MIT Press.

Marantz, Alec. (1993) Implications of asymmetries in double object constructions. In *Theoretical aspects of Bantu grammar*, ed. Sam Mchombo, 113–150. Stanford: CSLI Publications.

McGinnis, Martha. (2001) Variation in the phase structure of applicatives. *Linguistic Variation Yearbook* 1: 105–146.

Merchant, Jason. (1999) The syntax of silence: Sluicing, islands, and identity in ellipsis. Unpublished doctoral dissertation, University of California, Santa Cruz.

Narita, Hiroki. (2014) *Endocentric structuring of projection-free syntax*. Amsterdam: John Benjamins.

Nie, Yining. (2023) Applicative recursion and nominal licensing. *Linguistic Inquiry*, Early Access Corrected Proof: 1–44.

Pesetsky, David. (1995) *Zero syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.

Postal, Paul. (1974) *On raising: One rule of English grammar and its theoretical implications*. Cambridge, MA: MIT Press.

Pylkkänen, Liina. (2002) Introducing arguments. Unpublished doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.

Richards, Norvin. (1997) What moves where when in which language?. Unpublished doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.

Runner, Jeffrey. (1998) *Noun phrase licensing*. New York: Garland Publishing.

Sportiche, Dominique. (1988) A theory of floating quantifiers and its corollaries for constituent structure. *Linguistic Inquiry* 19: 425–449.

Stowell, Tim. (1981) Origins of phrase structure. Unpublished doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.

Tanaka, Hideharu. (in press) Floating quantifiers in English and their semantic composition. *Proceedings of the 40th West Coast Conference on Formal Linguistics*, *WCCFL* 40.

Wexler, Kenneth, and Peter Culicover. (1980) *Formal principles of language acquisition*. Cambridge, MA: MIT Press.